

千葉県学習協会『資本論』講座

講師：宮崎礼二（明海大学経済学部 准教授）

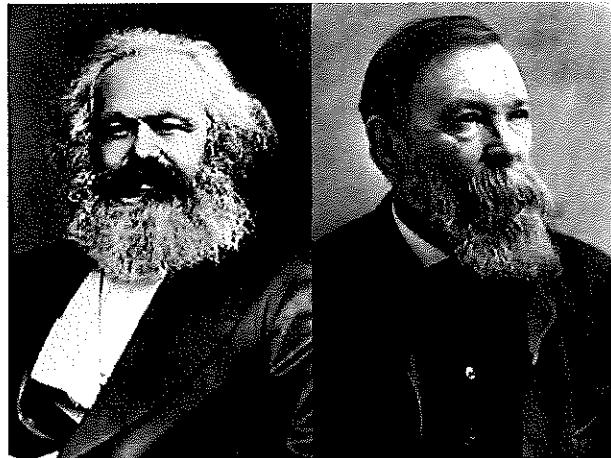
第4回：新版『資本論』（2022年9月18日）

第一巻 第二分冊

第二篇 貨幣の資本への転化

第三篇 絶対的剩余価値の生産

（第五章 労働過程と価値増殖過程 第二節 価値増殖過程 まで）



新日本出版社新版ページ番号は【】

() 内の番号はヴォルケ版『資本論』原書のページ番号を付記

新版『資本論』新日本出版社 第二分冊 進行計画

9月 18 日 イントロダクション

第一分冊振り返り

第二分冊全体像

第二篇 貨幣の資本への転化

第四章 貨幣の資本への転化

第一節 資本の一般的定式

第二節 一般的定式の諸矛盾

第三節 労働力の購買と販売

第三篇 絶対的剩余価値の生産

第五章 労働過程と価値増殖過程

第一節 労働過程

第二節 価値増殖過程

10月 16 日 第六章 不変資本と可変資本

第七章 剰余価値率

第一節 労働力の搾取度

第二節 生産物の比率的諸部分での生産物価値の表現

第三節 シーニアの「最後の一時間」

第四節 剰余生産物

第八章 労働日

第一節 労働日の諸限界

11月 20 日 第二節 剰余労働にたいする渴望。工場主とボヤール

第三節 搾取の法的制限のないイギリスの産業諸部門

第四節 昼間労働と夜間労働。交代制

第五節 標準労働日獲得のための闘争。一四世紀中葉から一七世紀末までの労働日延長のための強制法

第六節 標準労働日獲得のための闘争。法律による労働時間の強制的制限。一八三三 - 一八六四年のイギリスの工場立法

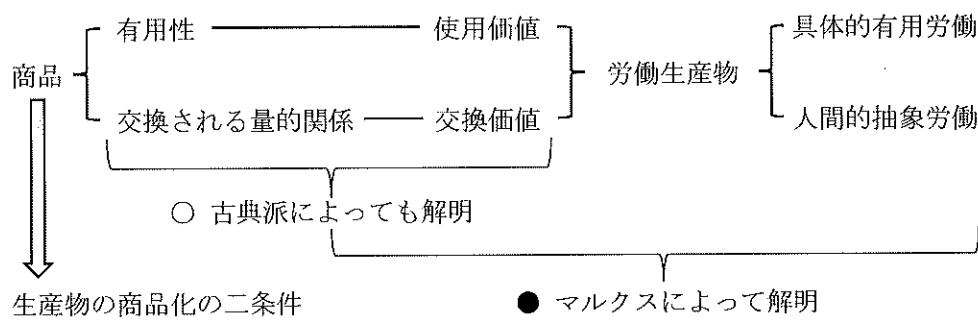
第七節 標準労働日獲得のための闘争。イギリスの工場立法が他国における反作用

第九章 剰余価値の率と総量

第4回講座イントロダクション

1. 第一分冊の振り返り

(1) 商品の二要素と労働の二面性



- ① 自分のためにではなく、他人のための使用価値の生産

- ② 他人の手に交換を通じて引き渡し (①条件を満たす年貢には②はない)

= 歴史的な存在としての商品

● 労働の二重性の把握

人間の労働が生産する使用価値の特性に対応する具体的有用労働としての性格と、生産するモノも労働の仕方も異なるすべての生産労働に共通する人間労働一般という性格とが、二重の性格をもつていていることを解明し、価値論の根本に据えた。

⇒ 第一部印刷中に書いた手紙 (マルクス→エンゲルス)

「僕の本のなかの最良の点は次の二点だ。(1) (これは事実のいっさいの理解がもとづいている) 第一章ですぐに強調されているような、使用価値で表されるか交換価値で表されるかに従っての労働の二重性、(2) 剰余価値を利潤や利子や地代などというその特殊な諸形態から独立に取り扱っているということ。ことに、第二巻 (=第二部 —— 宮崎) ではこれが明らかになるであろう。これらの特殊な諸形態をいつでも一般的な形態と混同している古典派経済学におけるこれら取扱いは、ごった煮のようなものだ。」(「マルクスからエンゲルスへ」

1867年8月24日全集⑩ p. 273)

(2) 価値形態論の要：貨幣の存在

● 貨幣の「全秘密」

単純な商品交換の仕組みが発展したものにすぎない

A 「簡単な、個別的な、また偶然的な価値形態」 → B 「全体的な、また展開された価値形態」 → C 「一般的価値形態」 → D 「貨幣形態」



もっとも簡単な交換関係 (A) のなかに含まれている貨幣の萌芽形態

→ 中間項 (B) (C) → 貨幣形態 (D)

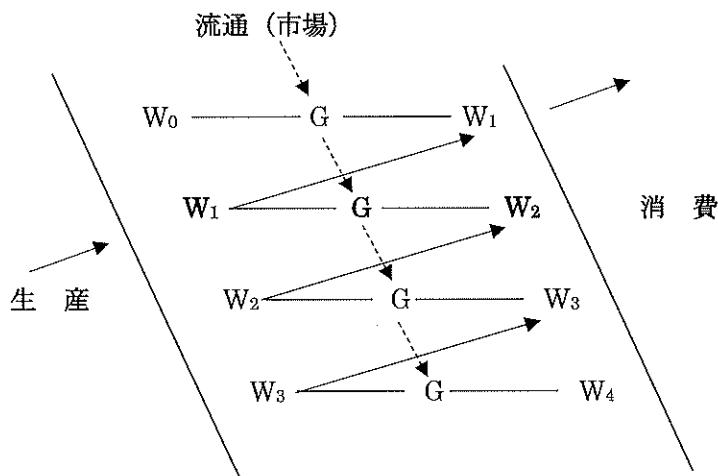
「さて、その自然形態に等価形態が社会的に癒着する独自な商品種類は、貨幣商品となる。または、貨幣として機能する。商品世界の内部で一般的等価物の役割を演じることが、その商品種類の独自な社会的機能となり、したがって、その社会的独占となる。…（略）…この特権的地位を歴史的にかちとったのは、特定の商品、すなわち、金である。」

【① p. 126】(p. 83)

(3) 商品の姿態変換；流通手段

商品 (Ware) : W 貨幣 (Geld) : G

販売 : $W \rightarrow G$ (商品の貨幣への転化) }
購買 : $G \rightarrow W$ (貨幣の商品への転化) } 両行為の統一：商品の交換過程



- 商品流通 (姿態変換) : 諸商品の販売と購買の絡み合いによって、社会的な生産と消費との間を媒介
- 流通手段としての貨幣 : 購買手段として現れ、W は売手から買手に移る
G は買手から売手に移る
- W は1回の運動で流通 (市場) から消えるが、G は購買手段として繰り返し W を運動させる
G : 生産と消費を媒介し、社会的再生産の契機

2. 第二分冊の全体像

第一分冊：資本主的生産様式の土台をなす市場経済の解明のための商品論・貨幣論

→ 商品世界が貨幣を生み出し、商品流通が展開される経済。だが、資本はまだ登場しない

第二分冊：貨幣が資本に転化、商品世界の必然的な產物として資本が生み出される

→ 資本の研究

★ 剰余価値がどこから生まれてくるのか（第二篇）

★ どのような方法でその拡大が追求されるのか（第三篇～第六篇（第3分冊））

★ 拡大した資本の蓄積がどのように進行するのか（第七篇（第4分冊））

⇒ ① 資本とは何か、② 商品としての労働力が資本の価値増殖の秘密を握っていること、③ 価値増殖がどのように実現するのか、について解説し、なぜ資本家は労働時間を延長するのかを明らかにする。

第二篇 貨幣の資本への転化

第四章 貨幣の資本への転化

第一節 資本の一般的定式

1. 資本主義における 16 世紀の意義

▶ 「商品流通は資本の出発点である。商品生産、および発達した商品流通——商業——は、資本が成立する歴史的諸前提をなす。世界商業および世界市場は、一六世紀に資本の近代的生活史を開く。」
【p. 255】(p. 161)

- 商品 = 資本主義生産様式の基礎をなす単位
- 商品流通から資本の成立への転機は 16 世紀
- <大航海時代>の開始
 - ヨーロッパ文明の世界とのはじめての接触
 - 「世界商業」「世界市場」の成立
 - スペイン・ポルトガルからオランダ・イギリスへの覇権交代
 - 資本主義的生産様式の初步 = マニュファクチュア時代：16 世紀に始まる
→ 資本主義の始まり
 - 地理上の発見による商人資本の急速な発展 = 封建制の打破

2. W-G-W

▶ 「商品流通の直接的形態は、W-G-W、商品の貨幣への転化および貨幣の商品への再転化、買うために売る、である。」
【p. 256】(p. 162)

- G-W で入手した商品を、使用価値として消費
= 生産者にとっての非使用価値の使用価値への転化

3. G-W-G

▶ 「…それとは独特に区別される第二の形態 G-W-G、貨幣の商品への転化および商品の貨幣への再転化、売るために買う、を見いだす。このあとのほうの流通を描いて運動する貨幣が、資本に転化し、資本に生成するのであって、その性質規定から見てすでに資本である。」
【p. 256】(p. 162)

- 2 つの対立する局面
 - G-W : 「購買では、貨幣が商品に転化される」 【p. 257】(p. 162)
 - W-G : 「販売では、商品が貨幣に再転化される」 【p. 257】(p. 162)
→ G-G : 「貨幣と貨幣との交換」 【p. 257】(p. 162)
- 「…たとえば 100 ポンド・スター・リングを 100 ポンド・スター・リングと交換しようとするのであれば、流通過程 G-W-G はばかげた無内容なものであろう。」
【p. 251】(p. 162)

■ G-W-G'

● $G' = G + \Delta G$

→ 「この増加分、または最初の価値を超える超過分を、私は剩余価値(surplus value)と名づける。このように、最初に前貸しされた価値は、流通のなかで自己を維持するだけでなく、流通のなかでその価値の大きさを変え、ある剩余価値をつけ加える。すなわち自己を増殖する。そして、この運動が、前貸しされた価値を資本に転化させるのである。」

【p. 262】(p. 165)

◎ 前貸しされた貨幣：ある物を再び売るために買う場合

◎ 支出：売るためにではなく、買う場合

【p. 259】(p. 163)

▶ 剰余価値の命題

■ 「循環 W-G-W は、ある一つの商品の極から出発して別の一商品の極で終結するのであって、このあとの商品は流通から出て消費にゆだねられる。それゆえ、消費、欲求の充足、一言で言えば使用価値が、この循環の究極目的である。これに反して、循環 G-W-G は、貨幣の極から出発して、最後に同じ極に帰ってくる。だから、この循環を推進する動機とそれを規定する目的とは、交換価値そのものである。」

【p. 261】(p. 164)

→ 資本の循環の推進的動機と規定的目的=「交換価値」の増殖

■ 「単純な商品流通——購買のための販売——は、流通の外にある究極目的、すなわち使用価値の取得、諸欲求の充足のための手段として役立つ。これに反して、資本としての貨幣の流通は自己目的である。というのは、価値の増殖は、この絶えず更新される運動の内部にのみ存在するからである。それだから、資本の運動には際限がない。」

【pp. 264-265】(p. 167)

▶ 資本家の規定

■ 「この運動の意識的な担い手として、貨幣所有者は資本家になる。」【p. 266】(p. 167)

■ 「…彼は資本家として、または人格化された——意志と意識とを与えられた——資本として、機能するのである。」

【p. 266】(p. 168)

■ 資本家と貨幣蓄蔵者

「この絶対的な致富衝動、この熱情的な価値の追求は、資本家と貨幣蓄蔵者とに共通であるが、しかし、貨幣蓄蔵者は愚かしい資本家でしかないので、資本家は合理的な貨幣蓄蔵者である。価値の休みのない増殖——貨幣蓄蔵者は、貨幣を流通から救い出そうとすることによってこのことを追求するのであるが、より賢明な資本家は、貨幣を絶えず新たに流通にゆだねることによってこのことを達成する。」

【pp. 266-267】(p. 168)

▶ 資本の循環の重要な特質

「実際には、価値がここでは過程の主体になるのであって、この過程のなかで価値は、貨幣と商品とに絶えず形態を変換しながらその大きさそのものを変え、原価値としての自己自身から剩余価値としての自己を押し出して、自己自身を増殖する。」

【p. 268】(p. 169)

第二節 一般的定式の諸矛盾

1. 商品交換と剩余価値

▶ 商品交換の法則：等価物どうしの交換

「…単純な商品流通において、ある使用価値が別の使用価値と取り替えられるということ以外には、商品の変態、商品の単なる形態変換しか起こらない。同じ価値、すなわち同じ分量の対象化された社会的労働が、同じ商品所有者の手のなかに、最初には彼の商品の姿態で、次にはこの商品が転化される貨幣の姿態で、最後にはこの貨幣が再転化される商品の姿態で、存在し続けている。この形態変換は価値の大きさの変化を少しも含まない。」

【p. 275】(p. 172)

- 「商品交換は、その純粹な姿態においては、等価物どうしの交換であり、したがって価値を増やす手段ではない」 【p. 276】(p. 173)
- 「もし交換価値の等しい商品どうしが、または交換価値の等しい商品と貨幣とが、したがって等価物どうしが交換されるならば、明らかにだれも、自分が流通に投じるよりも多くの価値を流通から引き出すことはしない。その場合には剩余価値の形成は行なわれない。」 【pp. 278-279】(p. 174)
- 「ところが、商品の流通過程がその純粹な形態において前提とするのは、等価物どうしの交換である。」 【p. 279】(p. 174)

▶ 商品交換の法則の侵害の場合

- 非等価物の交換の場合：価値以上に売る + 価値以下に買う

● 価値以上で売る

「売り手としては 10だけ得をしたが、買い手としては 10だけ損をする。」

【pp. 279-280】(p. 175)

● 価値以下で買う

「彼は、買い手として 10%もうけるまえに、すでに売り手として 10%の損をしていたのである。」

【p. 280】(p. 175)

⇒「すべてはやはりもとのままである。」

【p. 280】(p. 175)

「それゆえ、剩余価値の形成、したがってまた貨幣の資本への転化は、売り手たちが商品をその価値よりも高く売るということによっても、また、買い手たち

が消費をその価値よりも安く買うということによっても、説明されえないの
である。」

【pp. 280-281】(p. 175)

★ 「等価物どうしが交換されても剩余価値は生じないし、非等価物どうしが交換され
てもやはり剩余価値は生じない。流通または商品交換はなにも価値を創造しない。」
【pp. 284-285】(pp. 177-178)

▶ 商業資本と高利貸資本の場合

「流通は価値を創造しない」のに、流通部門で活動する商業資本や高利貸資本は、も
うけを引きだしている！？

■ 商人資本

- 「…等価物どうしが交換される限り、商業資本は成り立たないように思われる
のであり、それゆえ、買う商品生産者と売る商品生産者とのあいだに商人が
寄生的に割り込み、これらの商品生産者の両方からだまし取るということから、
商業資本を導き出すほかないように思われる。」 【p. 286】(p. 178)
- 「商業資本の価値増殖を商品生産者にたいする単なる詐欺によって説明すべき
でないとすれば、そのためには一連の長い中間項が必要なのであるが、商品流
通とその簡単な諸契機とが唯一の前提となっているいまの場合には、それらの
中間項はまだまったく欠けている。」 【p. 286】(p. 179)

■ 高利貸資本

- 「商業資本にあてはまるることは、高利貸資本にはいっそうよくあてはまる。」
【p. 286】(p. 179)
- 「高利貸資本においては、形態 $G-W-G'$ が、無媒介の両極 $G-G'$ に、より
多くの貨幣と交換される貨幣に、貨幣の本性と矛盾しており、したがってまた
商品交換の立場からは説明しえない形態に、短縮されている。」 【p. 287】(p. 179)

⇒ 商業資本については『資本論』第3部 第4篇、高利貸資本については第5篇

2. 二重の結果

- ▶ 「すでに明らかにしたように、剩余価値は流通からは生じないのであり、したがつ
て、それが形成される場合には、流通そのものの中では目に見えないなにごとかが、
流通の背後で起こっているに相違ない。」 【p. 288】(p. 179)
「したがって、資本は、流通から発生するわけにはいかないし、同じく、流通から發
生しないわけにもいかない。資本は、流通のなかで発生しなければならないと同時に、
流通のなかで発生してはならないのである。」 【p. 289】(p. 180)

- ① 「貨幣の資本への転化は、商品交換に内在する諸法則にもとづいて展開されるべきであり、したがって等価物どうしの交換が出発点をなす。」
 = 等価物交換の法則 【p. 289】(pp. 180-181)
- ② 「いまのところまだ資本家の幼虫として現存するにすぎないわが貨幣所有者は、商品をその価値どおりに買い、その価値どおりに売り、しかもなお過程の終わりには、彼が投げ入れたよりも多くの価値を引き出さなければならない。」
【p. 289】(p. 181)

第三節 労働力の購買と販売

1. 剰余価値の源泉としての「商品」の発見

► 購買と販売ではないどこの段階で価値の変化が起こるのか？

「というのは、等価物どうしが交換されるのであり、商品はその価値どおりに支払われるからである。したがって、この変化は、その商品の使用価値そのものから、すなわちその商品の消費から生じるしかない。ある商品の消費から価値を引き出すためには、わが貨幣所有者は、流通部面の内部で、すなわち市場において、ある商品——その使用価値そのものが価値の源泉であるという独自な性質をもっている商品を、したがってそれの現実的消費そのものが労働の対象化であり、それゆえ価値創造である商品を、発見する幸運にめぐまれなければならないだろう。そして、貨幣所有者は、市場でこのような独特な商品を——労働能力または労働力を、見いだすのである。」

【p. 291】(p. 181)

■ 労働力・労働能力とは？

「…人間の肉体、生きた人格のうちに存在していて、彼がなんらかの種類の使用価値を生産するそのたびごとに運動させる、肉体的および精神的諸能力の総体のことである。」

【p. 292】(p. 181)

► 貨幣所有者が商品としての労働力を市場で見出すための条件

■ 「商品交換は、それ自体、商品交換自身の本性から生じる依存関係以外には、いかなる依存関係も含んでいない。この前提のもとでは、商品としての労働力は、ただ、労働力がそれ自身の所有者によって、すなわちそれが自分の労働力である人によって、商品として売りに出されるかまたは売られる限りにおいてのみ、またそのゆえにのみ、市場に現われうる。」

【p. 292】(p. 182)

■ 「労働力の所有者が労働力を商品として売るためには、彼は、労働力を自由に処分することができなければならず、したがって自分の労働能力、自分の人格の自由な所有者でなければならない。」

【p. 292】(p. 182)

■ 「労働力の所有者と貨幣所有者とは、市場で出会って互いに対等な商品所有者と

して関係を結ぶ」

「両方とも法律上では平等な人格である」

【p. 292】(p. 182)

- 「自分の労働力を、いつも自分の所有物、それゆえまた自分自身の商品として取り扱わなければならない」

「自分の所有権は放棄しない」

【p. 293】(p. 182)

- 「…労働力の所有者が、自分の労働の対象化された商品を売ることができないで、むしろ自分の生きた肉体のうちにのみ存在する自分の労働力そのものを商品として売りに出さなければならぬ」

【p. 294】(p. 183)

2. 「自由」の二重の意味

- ▶ 「したがって、貨幣を資本に転化させるためには、貨幣所有者は商品市場で自由な労働者を見いださなければならない。」

【p. 295】(p. 183)

- 「自由な人格として自分の労働力を自分の商品として自由に処分するという意味」

- 「売るべき他の商品をもっておらず、自分の労働力の実現のために必要ないつよいの物から解き放たれて自由であるという意味」

【p. 295】(p. 183)

3. 資本：社会的生産過程の一時代の告示

- ▶ 「自然は、一方の側に貨幣または商品の所有者を、他方の側に単なる自分の労働力の所有者を、生み出しえしない。この関係は自然史的関係ではないし、また、歴史上のあらゆる時代に共通な社会的関係でもない。」

【p. 295】(p. 183)

- 商品

「商品になるためには、生産物は、生産者自身のための直接的な生活維持手段として生産されてはならない。」

【p. 296】(pp. 183-184)

「生産物量の圧倒的部分が直接に自家需要に向けられていて商品に転化していくなくても、したがって社会的生産過程がその全体的な広さと深さの点でまだまだ交換価値に支配されているというにはほど遠くても、商品生産および商品流通は生じうる。」

【p. 296】(p. 184)

- 貨幣

「貨幣は商品交換の一定の発展程度を前提とする。貨幣の特殊な諸形態——単なる商品等価物、または流通手段、または支払手段、蓄蔵貨幣、世界貨幣——は、いずれかの機能の作用範囲の違いと相対的優越とに応じて、社会的生産過程のきわめて異なる諸段階を示している。にもかかわらず、経験によれば、これらのすべての形態が形成されるためには、商品流通の比較的わずかな発達で十分である。」

【p. 296】(p. 184)

■ 資本

「資本については事情は異なる。資本の歴史的な存在諸条件は、商品流通および貨幣流通とともにそこにあるというものでは決してない。資本は、生産諸手段および生活諸手段の所有者が、みずから労働力の売り手としての自由な労働者を市場で見いだす場合にのみ成立するのであり、そして、この歴史的条件は一つの世界史を包摂する。だから、資本は、最初から社会的生産過程の一時代を告示する。」

【p. 291】(p. 184)

⇒ 世界史的展開については、第四分冊 第24章 いわゆる本源的蓄積

4. 労働力商品の価値規定

► 「他のすべての商品と同じく、労働力も一つの価値をもっている。この価値はどのようにして規定されるのか？」

【p. 297】(p. 184)

■ 商品の価値 = その商品の生産または再生産に必要な労働の量によって決定
「労働力の商品は、他のどの商品の価値とも同じく、この独特な物品の生産に、したがってまた再生産に必要な労働時間によって規定されている。」

【p. 297】(pp. 184-185)

⇒ 「したがって、労働力の生産はこの生きた個人の生存を前提する」

【p. 298】(p. 185)

「労働力の生産とは、この個人自身の再生産または維持のことである。自分を維持するためには、生きた個人は、一定量の生活諸手段を必要とする。したがって、労働力の生産に必要な労働時間は、この生活諸手段の生産に必要な労働時間に帰着する。」

【p. 298】(p. 185)

► 生活諸手段の総量の価値

■ 「食物、衣服、暖房、住居などのような自然的欲求そのものは、一国の気候その他の自然の独自性に応じて異なる。」

【p. 298】(p. 185)

■ 「…いわゆる必需欲求の範囲は、その充足の仕方と同様に、それ自身一つの歴史的産物であり、そのため、多くは一国の文化段階に依存するのであり、とりわけまた、本質的には、自由な労働者の階級がどのような条件のもとで、それゆえどのような慣習と生活要求とをもって形成されたか、に依存するのである。」

【p. 298】(p. 185)

⇒ 「労働力の価値規定は、他の商品の場合とは対照的に、歴史的かつ社会慣行的な一要素を含んでいる。」

【p. 298】(p. 185)

■ 「労働力の所有者は死をまぬがれない。したがって、貨幣の資本への継続的転化が行われる前提として、市場における彼の出現が継続的現象であるためには

- 労働力の売り手は『生殖によって、どの生きている個体も自己を永久化するのと同じように』自己を永久化しなければならない。』【p. 299】(pp. 185-186)
- ⇒ 「したがって、労働力の生産に必要な生活手段の総計は、補充人員すなわち労働者の子供たちの生活諸手段を含む」 【p. 299】(p. 186)
- 「一般的人間的な本性を変化させて、それが特定の労働部門における技能と熟練とに到達し、発達した独特な労働力になるようにするためにには、特定の養成または教育が必要であり、それにはまたそれで、大なり小なりの額の商品等価物が費用としてかかる。」 【p. 300】(p. 186)
- ⇒ 「…労働力の生産のために支出される価値の範囲にはいっていい。」 【p. 300】(p. 186)

5. 労働力商品の消費過程

- ▶ 「この貨幣所有者自身が交換で受け取る使用価値は、労働力の現実の使用、すなわちその消費過程においてはじめて現われる。」 【p. 306】(p. 189)
- 「労働力の消費過程は、同時に、商品の生産過程であり剩余価値の生産過程である。労働力の消費は、他のどの商品の消費とも同じく、市場すなわち流通部面の外で行われる。」 【p. 306】(p. 189)
- ⇒ 「…生産という秘められた場所に、『無用の者立ち入るべからず』と入口に掲示してあるその場所に、はいっていこう。ここでは、どのようにして資本が生産するかということだけでなく、どのようにして資本そのものが生産されるかということもまた、明らかになるであろう。貨殖の秘密がついに暴露されるに違いない。」 【p. 306】(p. 189)

6. 労働力の売買：「天賦人権の眞の楽園」

- ▶ 「ここで支配しているのは、自由、平等、所有、およびベンサムだけである。」 【p. 306】(p. 189)
- 自由
「…労働力の買い手と売り手は、彼らの自由意志によって規定されるだけだからである。彼らは、自由で法律上対等な人格として契約」【p. 306】(p. 189)
- 平等
「彼らは商品所有者としてのみ互いに関連し合い、等価物と等価物を交換するからである」 【p. 306】(p. 189)
- 所有
「だれもみな、自分のものを自由に処分するだけだからである。」 【p. 306】(p. 189)

■ ベンサム

「両当事者のどちらにとっても、問題なのは自分のことだけだからである。」

【p. 306】(p. 189)

第三篇 絶対的剩余価値の生産

第五章 労働過程と価値増殖過程

第一節 労働過程

剩余価値：その使用価値そのものが価値の源泉である労働力商品の消費過程からしか生まれない

1. 労働過程の一般的本性

▶ 「労働力の使用は労働そのものである。労働力の買い手は、その売り手を労働させることにより、労働力を消費する。」 【p. 309】(p. 192)

▶ 「労働は、まず第一に、人間と自然とのあいだの一過程、すなわち人間が自然とのその物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程である。人間は自然素材そのものに一つの自然力として相対する。彼は、自然素材を自分自身の生活のために使用しうる形態で取得するために、自分の肉体に属している自然諸力、腕や足、頭や手を運動させる。人間は、この運動によって、自分の外部の自然に働きかけて、それを変化させることにより、同時に自分自身の自然を変化させる。彼は自分自身の自然のうちに眠っている諸能力を発展させ、その諸力の働きを自分自身に服属させる。」 【p. 310】(p. 192)

■ 「人間にのみ属している形態の労働」

= 「…彼は自然的なもののうちに、彼の目的——その目的を彼は知っており、その目的は彼の行動の仕方を法則として規定し、彼は自分の意志をその目的に従属させなければならない——を実現する。」 【p. 311】(p. 193)

2. 労働過程における概念と規定：労働対象と労働手段

▶ 労働対象 【pp. 311-312】(p. 193)

■ 「…人間の関与なしで、人間の労働の一般的対象として存在」：土地や水

■ 天然に存在する労働諸対象

「労働が大地との直接的結びつきから引き離すだけのいっさいの物」：魚、木材、鉱石

■ 人間の労働を媒介に変化している労働対象：原料

「労働対象がそれ自体すでにそれ以前の労働によっていわば濾過」

▶ 労働手段

「労働者が自分と労働対象とのあいだにもち込んで、この対象にたいする彼の能動活動の導体として彼のために役立つ、一つの物または諸物の複合体」【p. 312】(p. 194)

■ 「労働諸手段は、人間労働力の発達の測定器であるばかりでなく、労働がそこにおいて行なわれる社会的諸関係の指標でもある。」 【p. 313】(p. 195)

■ 役割による分類

筋骨系統：「機械的労働諸手段」と 脈管系統：「管、桶、籠、壺」

■ 労働過程が行なわれるために必要な空間：土地、作業用建物、運河、道路

3. 生産手段

▶ 「全過程を、その結果の、すなわち生産物の立場から考察すれば、労働手段と労働対象の両者は生産手段として、労働そのものは生産的労働として現われる。」

【pp. 315-316】(p. 196)

■ 「…諸生産物は、それらが生産諸手段として新たな労働過程にはいり込むことによって、生産物という性格を失う。それらは、いまではもう生きた労働の対象的要因として機能するだけである。」 【p. 318】(p. 197)

= 紡績における生産手段としての紡績材料や紡錘（過去の労働生産物）

⇒ 「…それらの生産物の労働過程への投入、したがって生きた労働との接触は、こうした過去の労働のこれら諸生産物を使用価値として維持し実現するための唯一の手段なのである。」 【p. 320】(p. 198)

▶ 「労働は、その素材的諸要素、その対象およびその手段を消費し、それらを食い尽くすのであり、したがって消費過程である。この生産的消費が個人的消費と区別される点は、後者は諸生産物を生きた個人の生活諸手段として消費し、前者はそれらを労働の生活諸手段、すなわち生きた個人の活動する労働力の生活諸手段として消費する、ということである。」 【p. 320】(p. 198)

▶ 「われわれがその単純で抽象的な諸契機において叙述してきたような労働過程は、諸使用価値を生産するための合目的的活動であり、人間の欲求を満たす自然的なものの取得であり、人間と自然とのあいだにおける物質代謝の一般的な条件であり、人間生活の永続の自然的条件であり、それゆえこの生活のどの形態からも独立しており、むしろ人間生活のすべての社会形態に等しく共通なものである。」 【p. 320】(p. 198)

4. 資本主義的生産様式のもとでの労働過程

▶ 「労働過程の一般的本性は、労働者が労働過程を自分自身のためではなく資本家のために行なうということによっては、もちろん変化しえしない。」 【p. 322】(p. 199)

- 「労働が資本のもとに従属することによって生じる生産様式そのものの転化は、もっとのちになってからはじめて生じうるのであり、それゆえもっとあとになつてはじめて考察されるべきである。」 【p. 322】(p. 199)
 ⇒ 第5篇「絶対的および相対的剩余価値の生産」

▶ 2つの独自な現象

- 「労働者は、自分の労働が所属する資本家の管理のもとで労働する。」 【p. 322】(p. 199)
- 「…生産物は資本家の所有物であって、直接的生産者である労働者の所有物ではない。」 【p. 322】(p. 200)
 ⇒ 「労働過程は、資本家が買った諸物のあいだの、彼に所属している諸物のあいだの一過程である。だから、この過程の生産物が彼に所属するのは、彼のワイン地下貯蔵庫における発酵過程の生産物が彼に所属するのとまったく同じである。」 【p. 323】(p. 200)

第2節 値値増殖過程

1. 剰余価値が生まれる仕組み

- ▶ 「そこで、こんどはわれわれは、生産過程を価値形成過程として考察することにしよう」 【p. 325】(p. 201)
 ⇒ 「商品そのものが使用価値と価値との統一であるのと同様に、商品の生産過程は労働過程と価値形成過程との統一でなければならない。」 【p. 325】(p. 201)

- ▶ 糸製造（綿花から糸）の例 【pp. 325-332】(pp. 201-205)
- 原料：綿花 10 重量ポンド = 10 シリング + 労働手段：紡錘 = 2 シリング
 = 12 シリング ← 24 時間労働 = 2 労働日
- 労働力の日価値 = 3 シリング = 6 労働時間
 → 1 労働時間 = 1・2/3 重量ポンドの綿花を 1・2/3 重量ポンドの糸に転化
 (紡績)
- 6 時間で 10 重量ポンドの綿花を 10 重量ポンドの糸

(1・2/3 ポンド×6 時間) ×

$$= 3 \text{ シリング}$$

■ 糸 = 綿花 + 紡錘 + 紡績過程 (糸製造労働)

$$\begin{array}{ccc} 2 \text{ 労働日} & 6 \text{ 時間} = 2 \cdot 1/2 \text{ 労働日} \\ \downarrow & \downarrow \\ \text{生産手段} & \text{紡績労賃} \\ 12 \text{ シリング} & + & 3 \text{ シリング} = 15 \text{ シリング} = \text{糸 } 10 \text{ 重量ポンド} \end{array}$$

- 10重量ポンドの糸 = 15シリング
 $\rightarrow 1\text{重量ポンドの糸} = 15\text{シリング} \div 10\text{重量ポンド} = 1\text{シリング } 6\text{ペンス}$
- 「わが資本家は愕然とする。生産物の価値は、前貸しされた資本の価値と同じなのである。前貸しされた価値は増殖せず、なんらの剩余価値も生まなかつたのであり、したがって貨幣は資本に転化しなかつた。」 【p. 331】(p. 205)
 $\rightarrow \text{糸の価値} = \text{綿花} + \text{紡錘} + \text{労働力} \rightarrow \text{諸価値の合計}$

- ▶ 「労働者を二四時間のあいだ生かしておくために半労働日が必要だということは、労働者がまる一日労働することを決してさまたげはしない。」 【p. 336】(p. 208)
 \Rightarrow 「したがって、労働力の価値と、労働過程における労働力の価値増殖とは、二つの異なる大きさである。」 【p. 336】(p. 208)
- 労働力商品の独特的な使用価値 = 「…決定的なのは、この商品の独特的な使用価値、すなわち価値の源泉であり、しかもそれ自身がもっているよりも多くの価値の源泉であるという独特的な使用価値であった」 【p. 337】(p. 208)

- ▶ 6労働時間から12労働時間への延長
「…労働者は、作業場において、六時間だけでなく、一二時間の労働過程に必要な生産諸手段を見いだす。一〇重量ポンドの綿花が六労働時間を吸収して一〇重量ポンドの糸に転化したのであれば、二〇重量ポンドの綿花が一二労働時間を吸収して二〇重量ポンドの糸に転化するであろう。」 【p. 337】(p. 208)

■ 糸 = $20\text{重量ポンド綿花} + \text{紡錘} + \text{紡績過程 (糸製造労働)}$

4労働日	12時間	= 5労働日
↓	↓	
生産手段	紡績労賃	
24シリング	+	3シリング = 27シリング

- 20重量ポンドの糸 = 30シリング
 \Rightarrow 前貸しされた価値 27シリング + 3シリング
 $=$ 「こうして二七シリングは三〇シリングに転化した。それは、三シリングの剩余価値を生んだ。手品はついに成功した。貨幣は資本に転化した。」
【p. 338】(p. 209)